



光受寺通信

H.28年4月1日 発行
発行者 光受寺
<http://koujyuji.com/>

今年も多くの来寺者で境内は賑わいました。梅はもちろんのこと、書道展や写真展それにおひなさま展示と、催し物も多かったことなどから入堂された方も多く、さらに書院においてご記帳いただいた方が、およそ1,500名ほどありました。

来寺者全体ではそのおよそ十倍ほどはあったのではないかと考えていますが、まことに信じられないほどの方々に光受寺の山門をくぐっていただいたこととなります。

昨年の中日新聞冊子『巨木巡礼』に始まり、今年は岐阜を代表する梅の名木として新聞でも紹介され、一段と有名になったようで、今年は関西方面からのバスツアーでの来寺者が多かったようです。

その分近隣の方々には交通混雑・駐車等でご迷惑をおかけしたようで、まことに申し訳なく思っております。事実何度もお叱りを受けたりもしましたが光受寺では対応が困難なことでした。

駐車場の案内もされており、ボランティアでの交通整理もされ、注意書までされていましたので、今回のことは墨俣にお越しいただいた方々のマナーの問題ではなかったかと受け止めています。

ちなみに光受寺駐車場は、近隣のお寺さまや住民の方々の葬儀、また大きな行事ではご利用いただいたこともありますし、桜の季節、天王祭、平日でも当寺で特別なことがない限り、まったく開放状態にしてあります。開かれた寺を目指す光受寺としては、これからもこの姿勢を貫き、心広く受け止めていきたいと思っております。

このひと月間は多くの方々との出会いがあり、未だ知らない広い世界があることを教えられました。私自身を振り返る良いご縁にもなったように思っています。

春季永代経にて

一若坊守の法辞

熱い視線を一身に受け、緊張をこらえながらも約四十分間、よく頑張つてやってくれたと思います。



平成28年3月20日(日) 午後

お寺とは無縁だった過去の自分を振り返りながら、八年間のお寺との関わりから、また大学での学びから新鮮な心で感じたことを率直に話してくれました。
一門徒さんの反応は大変好印象だったようです。同じ立ち位置に立つての話は分かりやすく、住職の話より良かったと言われてしまいました。確かにそんな感じと、私は複雑な思いになりました。三月二十四日に補任されました。

今年も多くの感動をいただきました。



会期中、メジロ撮りに没頭していました。いっぱい撮れました。上の写真はお気に入りの一作品です。いつか作品展実施?)



3月6日(日)のライトアップきれいでしたよ。
梅に写真展、書道展そしてひな人形と境内はとてもにぎやかでした。



ありがとうございました。

今年で三年目。会期中は毎日早朝から雑巾がけをしていただきました。一門徒ではありませんが、奉仕でやっていたのだいていたのです。
岐阜市、男性。



悪人とは誰のよじなのか

T S

親鸞聖人は「悪人こそ救われる」と説きました。この教えは真宗で重要な意味を持っています。この場合の悪人とはどういつ人を指しているのでしょうか。

正信偈に「邪見憍慢悪衆生」という言葉があります。邪見とは自分は正しいと思っ心です。憍慢は人を見下す心です。そういう心を持つ人々は悪人であるという意味です。

例えば、あの人は変わった人だ」と思う場合には、自分はまだまともだ」と思い上がりがあるにあり、自分はあんな風にならなくて良かった」と思う場合には、人を見下しているわけです。何故、そのことが悪なのかと言えば、そういう心が、怒り恨み妬みを生み出す諸悪の根源となっているからです。世間では心で思う分には罪は問われませんが、仏教では心に思うだけで悪人なのです。そして、悪人の行先は地獄餓鬼畜生の世界しかありません。阿弥陀如来が極楽浄土を建立したわけは、地獄餓鬼畜生に苦しむ悪人を救うためです。

阿弥陀如来の願いは四十八ありますが、その第一願目がこの言葉です。

「たとい我、仏を得んに、国に地獄餓鬼畜生あらば、正覚を取らじ」(仏説無量寿経)

地獄は、思い通りにならない不自由な世界。餓鬼は、もっと欲しいもっと欲しいと貪る世界。畜生は、目の先の利害にとらわれて理性の働かない世界。つまり、これは死後の世界ではなく、今現在私達が生きている世界であります。私達は誰もが悪人であり心に鬼を潜め地獄の中に生きているのです。

親鸞聖人はこんな言葉を残しています。

私の心がよいから私は人を殺さないのではない。縁がないから殺さないだけであって、縁が熟せば、人は百人でも千人でも殺すかもしれない。人は縁によつてどのような行いをもしてしまう、そういう存在なのだ」(歎異抄133章)

このような自分は悪人だった」といつ自覚に立ったとき、阿弥陀如来の名を呼ばずにはいられないのです。そういう人を信心の人と呼び、親鸞聖人は次のように言っておられます。

信心の人は、その心すてに浄土に居す」と。(御消息集)



おめざじへのお誘い

月に一度はお寺へ参りていただきたいそんな思いが今の住職の願いとしてあります。先月寺の記事、寺のありかたにおつても申し述べましたが、寺をもつ身近に感じていたいただきたいと思つてゐるからです。門徒の誰もが集える共用の場所としての寺の本来の姿を取り戻してきたいと思つてゐるのです。

そしてその足掛かりとして「おめざじ」を皆さんと一緒に勤めたいと思っています。思い立ったのです。毎日もよいのですが、せめて月に一回くらいはいいかがでしょうか？

何となくの日常の生活が、何となくではいられない日常へと変わっていく機縁になるかも知れません。

誰が言ったのか 寺は年々いつから行く場所」といつ、行きたくないと言ひ逃れは、一生寺へ足を運ばないといひ言ひやも受け止められません。

みんな「自分教」で生きている偉い人ばかり。しかし、世間でいう「賢い、偉い」は、仏法ではまったく通用しないのです。

毎週 第二土曜日 朝7時半より
正信偈 同朋奉賛」でお勤めします。

新聞記事 原稿募集中！です。